

【東京】「目指すは令和の赤ひげ」児童精神科を軸に幅広く診療-大和行男・医療法人社団先陣会理事長に聞く◆Vol.2

2017年に独立開業、都内に3つのクリニックを立ち上げ

2025年5月28日（水）配信 m3.com地域版

東大卒の元教員志望、会社員を経て児童精神科医となった医療法人社団先陣会の大和行男理事長。大和氏は「理想の医療を提供したい」と2017年に開業し、都内に3つのクリニックを立ち上げてきた。「池上おひさまクリニック」（大田区）の診療に注力する現在は「令和の赤ひげ」を目指し、児童精神科以外にも幅広く診療する。専門性が高いと言われる児童精神科医がなぜ、「何でも診る」ポリシーを持つのか。その背景を探った。（2025年4月15日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



大和行男氏（本人提供）

成長につれて発症する病気を見逃さないことが大事

——大和先生は2010年に新潟大学医学部を卒業後、2017年に開業するまで複数の医療機関に勤務します。「児童精神科医としての成長」をテーマとしたとき、印象深い勤務地はどちらだったのでしょうか。

最初に挙げたいのは、先ほど紹介した佐藤病院（山形県）で齊藤卓弥先生に師事できたことです。齊藤先生からは「典型的な症例を把握しなさい」と言われ、私もそれを意識して診療してきました。患者さんの中には発達障害でコミュニケーションが苦手な子がいれば、ADHD（注意欠如・多動症）で衝動が強い子もいます。典型を知れば、亜型の症例にも対応しやすくなります。

同院では専門外来で子どもを診つつ、病棟で成人への精神科急性期医療を行ったことも大きかったです。というのも、子どもの患者さんは思春期、青年後期へと成長していきます。精神科領域でいえば、18歳や20歳になって躁うつ病や統合失調症を発症する場合もあるので、こうした異変を見逃さないためにも、大人の精神疾患を診られるようにしておくことが児童精神科医として重要だと私は考えています。

——資料によると、開業前は児童思春期の専門病棟でも働いていたそうですね。

横浜カメリアホスピタルで常勤医を務めながら、週に1度、川崎市の東横恵愛病院でも働いていました。横浜カメリアホスピタルの病棟は女子単独で散歩ができるなど開放的であり、一方の東横恵愛病院は男女混合で携帯電話の使用が禁止、教師が病院に来て授業を行うなど規則が比較的しっかりと設けられていました。児童思春期の病棟を運営する際、病棟を開放・閉鎖にするか、患者の男女比をどうするかは大きなポイントなので、特徴の異なる病棟を同時に経験できたのは、児童精神科医としての見識を深める上で良かったですね。

23区よりも医師が少ない多摩地域で落下傘開業

——そんなふうに勤務医として過ごす中、なぜ開業しようと思ったのですか。

自分の理想とする医療を提供したかったためです。病院勤務を続けていると、どうしても他の医師や組織の経営方針と異なることが出てきます。例えば、私が病棟で自分の患者さんを毎日診察していた際、他の医師から「止めてほしい」と言われたことがあります。その人は診察を週に1度と決めていたんですね。私は医師によって方針が異なるのは仕方ないと思うのですが、他にもいろいろと思うところがあり、組織内で軋轢が生まれると良くないだろうと独立を決めました。

横浜市や川崎市で開業すると患者さんの引き抜きになる可能性があると思ったので、縁のない東京都の日野市で物件を探し、2017年に「豊田こころのクリニック」を開設しました。日野市にしたのは、23区よりも医師が少ない多摩地域で開業した方が地域医療への貢献度が高いだろうと考えたためです。

——その後、八王子市に分院を設け、2024年には大田区に「池上おひさまクリニック」を開きます。

多摩地域の中でも、日野市や多摩市、府中市、これらに近い神奈川県相模原市には児童精神科が少なかったこともあり、予想以上に患者さんが来てくれました。そうしたニーズを踏まえて「東京の端で医療をしよう」と八王子市に2院目の「イーアス高尾クリニック」を開きました。多摩地域は車社会であり、児童精神科は親子で来院されるケースが多いので、いずれのクリニックでも駐車場が無料で利用できる環境にしたことはポイントです。1院目はそばに3時間駐車無料のショッピングモールがあり、2院目はショッピングモールの中にあったクリニックを事業承継しました。

——1院目は現在、閉院しているようですが。

開業医としての私の経験不足もあったと思います。私1人で1日に70～80人を診るなど外来が混み過ぎてしまい、体調を崩してしまって……。児童精神科は他科に比べて1人当たりの診察時間が長くなることもあるため、負担が大きかったのではないかと思います。それで閉院を考えたのですが、「そうであれば前向きな撤退をしたい」と、今度は経営をスリムにして23区内にクリニックをつくろうと考えました。イーアス高尾クリニックは信頼できる先生が見つかったので診療をお任せして、2023年に1院目を閉院。2つのクリニックで受け持っていた私の患者さんはクリニックで既に行っていたオンライン診療を活用し、継続して診ていく形にしました。

児童精神科と精神科に加え、内科、小児科、皮膚科、美容皮膚科も標ぼう

——今は「令和の赤ひげ」を目指しているそうですね。専門性の高い児童精神科としては珍しいモットーではないでしょうか。

「患者さんのかかりつけ医として、年代を問わずあらゆる症状を診ていきたい」——。開業医として経験を重ねていくうちに、こう思うようになりました。児童精神科には実にさまざまな相談が寄せられます。不登校や発達障害、近年増えてきたゲーム障害に関わるものだけでなく、「お腹が痛い」と子どもが言うけれど、これは心の問題でしょうか」と親御さんが相談されたり、コロナ禍が落ち着いてマスク着用が任意になった頃には「にきびがあってマスクを外せない」「人から見られている気がして怖い」といった視線恐怖症の子も増えてきました。特に、思春期の女の子は心療内科的なアプローチだけでなく、スキンケアや皮膚科の治療法を提案した方が回復が早いこともあります。そんな状況下で、風邪や腹痛、頭痛、皮膚疾患などを抱える親子をすぐに他院に紹介するのではなく、私がファーストタッチできると良いのではないかと。それで、当院では児童精神科と精神科だけでなく、内科、小児科、皮膚科、美容皮膚科も標ぼうしています。

加えて、「年代を問わず」というのも私のポリシーです。大学病院の児童精神科では一般的な児童の定義から15歳以上は診ないところがありますが、先ほど話したように患者さんを診ていると初診時は中学生でもやがて高校生になります。私は年齢によって患者さんを除外せず長くかかりつけ医でいたいと考えています。中には初診時に中学生だったものの今では社会人になっているケースもあります。個人的に、児童精神科は全ての診療科につながる分野だと感じています。実際、「子どもの咳の症状も診てもらえますか」と言われたお母さんご自身が咳をされていたとき、「お母さんも一緒に診ますよ」と言うとても喜ばれるんですね。「令和の赤ひげ」を目指し、「まずは何でも診る、何でも受け入れる」気概です。

◆大和 行男（やまと・ゆきお）氏

2000年東京大学教育学部卒。2010年新潟大学医学部卒。佐藤病院（山形県）での後期研修後、埼玉県済生会鴻巣病院、横浜カメリアホスピタル、東横恵愛病院を経て2017年に開業。東京都内で3つのクリニックを開設し、現在は「池上おひさまクリニック」（大田区）の診療に注力する。子どものこころ専門医、日本精神神経学会専門医・指導医、精神保健指定医など。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

